COMPANY'S CHALLENGE
NO.36

【プロフィール】
福岡県久留米市出身。大手百貨店に16年間勤務後、母がパタンナー※兼縫製職として勤める久留米絣のアパレルメーカーに転職。約6年勤めた後、母とオリジナルブランドを立ち上げることを決意し、2016年9月に会社設立。久留米絣の婦人服や小物の製作・販売、日本の伝統工芸の情報発信に取り組む。
※パタンナー／ファッションデザイナーが描いたデザインをもとにパターン（型紙）におこす専門職

伝統技術や文化は、もっと日常の中にあるべき ファッションアイテムとしての可能性を広げたい

株式会社わの栞　代表取締役　松村 かおり氏

母娘で久留米絣衣料を製造・販売

明治以降広く愛好されて木綿絣の代表的存在となった久留米絣は、藍色の美しさと織りの巧みさから国の重要無形文化財に指定されており、素朴な風合いと丈夫さが魅力です。しかしながら、久留米絣に対して『年配の人のもの』『もんぺ、作業着』というイメージを持つ方もいらっしゃるかもしれません。

そんな既成概念を払拭すべく、『久留米絣を民芸品ではなく、ファッションアイテムとして提案しよう』という発想から『わの栞』は生まれました。久留米絣のアパレルメーカーで働いていた母娘が立ち上げたブランドです。代表の松村かおりさんは、日本の風土に合った絣の良さを伝えるために、『デザインにこだわった服をつくろう。より幅広い世代の方に着ていただけるものをつくろう』と考えたのです。

デザインを支える確かな縫製技術・繊細な心配り

「久留米絣は丈夫な織物。着るほどに肌に馴染んでいきます。服として考えると、デザインと反物選びが一番大切なことですが、それだけでは直ぐに飽きられてしまいます。流行りのファストファッション※1と違い、長く着られるものだから、見えない部分にこだわり、丁寧に仕立てています。綺麗に縫製された物は、洗濯による型崩れも防いでくれるのです」。

娘の松村さんが描いたデザイン画を基に、母がパターン※2を起こして縫製を行います。ワンピースやジャケット、ブラウスといったファッションアイテムに、色柄や襟・袖周りの誂えでアクセントをプラス。着心地の良さと手入れのしやすさを重視し、日常でも気軽に使えるアイテムに仕立てています。また、縫製の美しさも松村さんがこだわっている点です。素材の久留米絣は反物。標準的な反物の幅は38cmです。小幅な布を柄合わせしてつなぎ、やわらかで曲線的なデザインに仕立てるには非常に高度な技術が必要です。

「『久留米絣でこんなお洒落な服は初めて見た。こんなのを着てみたかった』と言われる機会が増え、これまでより若い世代の方が手にとってくださ

1 百貨店勤務時代の人脈を活かして全国の百貨店の催事に出店。絣の概念を覆すデザインがバイヤーの目に留まり、すでに今年秋まで出店依頼でスケジュールがいっぱいになっている

2 松村さん自ら織元に出向き、反物の色柄にもアイデアを伝える。伝統的な色柄にこだわらないデザインは幅広い年齢層に支持され、久留米絣のファンの裾野を広げている

3 京都在住の伝統工芸女性作家5組が集まった『華のたくみびと』の作品。日常生活に取り入れやすい魅力的なデザインとなっている

4 幅38cmの反物を洋服に仕立てるには高度なパターン技術と縫製技術が必要。パタンナー兼縫製士の松村さんのお母様の技術は、若い縫製士へと受け継がれる

るようになりました」。

全国の百貨店催事への出店を続ける松村さんは、『幅広い世代の方に久留米絣の魅力が伝わってきている』と手応えを実感しています。

※1 最新の流行を採り入れながら低価格に抑えた衣料品を、短いサイクルで世界的に大量生産・販売するファッションブランドやその業態。
※2 『型、原型、模様、見本』の意味。ファッションでは、生地に用いられる柄（模様、図案）を指したり、衣服のための型紙のことを指す。

京都の女性職人をプロデュース

松村さんのもう一つの仕事として、京都在住の女性の伝統工芸作家・職人のプロデュースと販売のサポートをしています。『華のたくみびと』と称し、日本の伝統的な技術と文化を現代的なライフスタイルに取り入れ、未来へつなぐ活動に取り組んでいます。メンバーで集まって、女性ならではの目線から『つくる人』『つかう人』の意見を出し合ったうえで作品の改善に反映。研究熱心な仲間と切磋琢磨しあえる場を持つことで、松村さん自身の刺激にもなっているそうです。

日々、『わの栞』と『華のたくみびと』の商品や資料を携え、全国各地で開催される百貨店での催事・イベントに出店するなど営業活動に奔走し、月に1回は織元を訪問して反物を選ぶ。それらすべてを一人で担い、多忙を極めても、全国各地を回って直接お客様と出会うことを優先している松村さん。

「今は『華のたくみびと』をはじめとする、つくり手の思いを直接伝え、お客様のニーズを聞く地固めの時期。お客様とお話ししているとアイデアが浮かぶことも多く、次の商品に反映するようにしています」。

技術と文化の「伝道師」として

大手百貨店に出店すると海外観光客との接点も生まれ、久留米絣のアイテムがどの国の人に受け入れてもらえるかをリサーチする機会にもなっているとのこと。情報発信のターゲットエリアや手法については検討段階ですが、『日本の縫製技術を海外に伝えたい』と、将来的には海外展開も視野に入れているそうです。

「『伝統工芸』と言うと、すごく堅苦しいものに思われ、日常生活とかけ離れた手の届かないものになってしまいます。ですから、大切に箪笥にしまっておくようなものでなく、日々の暮らしの中でファッションとして楽しめるものをつくりたいと思っています」。松村さんたちの思いと技が織りなす数々のアイテムは、使い手が日々愛着を深めることによって次世代へと受け継がれることでしょう。

株式会社わの栞
〒815-0083 福岡市南区高宮1-13-22
TEL＆FAX 092-406-8944
https://wanoshiori.com/